

地域に潜むメンタルヘルスニーズに 応えるために：医療現場の実践から

趣旨：わが国のメンタルヘルスサービスは発展してきましたが、地域からは、必要なところにサービスが届いていないという声が聞かれます。この背景には、精神疾患以外の複雑な課題を抱える人へのサービス提供が取り残されがちであること、一般医療とメンタルヘルスサービスのつながりの不足などが考えられます。

このシンポジウムでは、能登半島地震であらわになった問題を糸口に、それぞれの医療現場で気付かれた課題とそれへの対応を報告し、よりよいメンタルヘルスサービス提供のあり方を共に考えます。ぜひご参加ください。

13:30-13:40 ▶ 主催者あいさつ

13:40-14:10 ▶ 講演 1

石川県における精神保健医療福祉の現状と課題：
能登半島地震から見たこと
北村 立（石川県立こころの病院）

14:10-14:40 ▶ 講演 2

地域における医師アウトリーチと
障害分野における支援困難事例への対応経験
川越 正平（医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所）

14:40-15:10 ▶ 講演 3

「にも包括」時代における精神科病院の生存戦略
木村 勝智（医療法人愛精会 あいせい紀年病院）

15:10-15:40 ▶ 講演 4

ジェネラリスト育成のための精神医学教育
須田 史朗（自治医科大学医学部精神医学講座）

15:40-15:50 ▶ 休憩

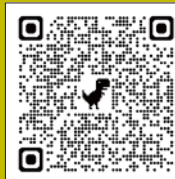
15:50-16:40 ▶ 指定発言・意見交換

石井 美緒（川崎市総合リハビリテーション推進センター）
長島 美奈（公益社団法人生駒会 松戸診療所）

16:40-16:50 ▶ まとめ

座長：竹島 正（川崎市総合リハビリテーション推進センター）
河野 稔明（川崎市総合リハビリテーション推進センター）

参加申込は
こちらです



<https://www.jamh.gr.jp>

令和6年

8月10日(土) 13:30-16:50(開場 13:15)

AP秋葉原1階O+Pルーム / ハイブリッド開催

〒110-0006 東京都台東区秋葉原1-1

定員(先着順)：AP秋葉原30名 / Zoomウェビナー 200名

参加費：無料

主催：公益財団法人 日本精神衛生会

共催：一般社団法人 全国精神保健福祉連絡協議会

お問合せ先：公益財団法人 日本精神衛生会事務局

TEL: 03-3518-9524

E-mail: z-seisin@dc4.so-net.ne.jp

北村 立

石川県立こころの病院 院長

抄録：今回の震災では、DPAT活動等を通じ、能登の、ひいては石川県全体の精神保健医療福祉体制について、改めて考えさせられた。能登地方は元々精神科の医療資源が乏しく、特に能登北部には精神科病院がないため、入院が必要な患者は七尾市や当院を含む石川中央医療圏に搬送するしかない。症状の重い患者は遠方の病院に長期に入院する傾向があり、彼らは通所・入所施設の少なさも相まって、地元に戻るのが困難である。他方、人や家が密集していないこと、匿名性が低く見知らぬ人がいないこと、住民同士の互助が強いことなどより、発達障害を含む精神障害者や認知症の人でも、行動障害が目立たなければ、地域で生活でき、地域の懐が深いと言える。高齢者は動けるうちは家にいるのが当たり前で、超高齢化のわりに要介護認定率は低く、介護予防事業も盛んでない。当日は、元々あった課題と震災でみえた課題を踏まえ、これからの心のケア活動を考えてみたい。

略歴：1987年自治医科大学卒。初期研修ののち、能登北部のへき地診療所の勤務を経て、1992年より石川県立高松病院（現こころの病院）に勤務。2013年より同院の院長を務めている。

川越 正平

医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所

抄録：在宅医療の実践には、狭義の医療を提供するだけでは不十分であり、介護や福祉と協同して包括的に対象者を支援する必要がある。2015年度より事例検討を通じて地域課題を抽出し、地域づくりや政策形成を図る地域ケア会議が制度化された。医療実践を通じて見聞する8050問題や、地域ケア会議における事例蓄積を踏まえて、松戸市地域ケア会議会長の立場から、在宅医療・介護連携推進事業における相談支援の機能を拡大する形で、医師アウトリーチという仕組みの創設を市に提案し、2016年度からの実施に至った。これまでの8年間に250例を超えるアウトリーチを実施、2019年度からは、高齢者に限らず、若年者や未成年者の依頼やいわゆる多問題家族などの対象にも一般財源を得る形で対応するようになった。高齢者の在宅医療経験を有する内科医など在宅医が中心的な役割を担って開始したが、精神科領域の医師等との協働が必要不可欠だと痛感している。

略歴：1991年東京医科歯科大学卒。虎の門病院での内科研修ののち、1999年千葉県松戸市に医師3名のグループ診療の形態であおぞら診療所を開設。2014年松戸市医師会在宅ケア担当理事、2018年松戸市在宅医療・介護連携支援センターを創設。2022年より松戸市医師会会長。主な著書に「医師アウトリーチから学ぶ地域共生社会実現のための支援困難事例集」（2023、長寿社会開発センター）。

木村 勝智

医療法人愛精会 あいせい紀年病院 常務理事・名誉院長

抄録：長期入院に基づく『隔離と収容』から短期入院に基づく『治療と地域での共生』へという精神科医療のパラダイムシフトにより、精神科病院は構造変革を迫られている。また今までは単独で策定されていた精神科医療の将来構想に関しても、国は精神障害にも対応した地域包括ケアシステム＝いわゆる『にも包括』を打ち出し、一般科と統合した形で地域医療構想に取り込もうとしている。長期入院患者の高齢化と認知症による入院の増加により、精神科病院における身体合併

症の頻度と重症度は今後飛躍的に高くなると予想される。さらには神経発達症に代表される児童・思春期・青年期精神医学のニーズも急激に高まっており、精神科病院もこうした分野への対応力を高めることが要求されると考える。精神科病院は従来までの機能に加えて、身体合併症、地域移行支援、児童・思春期・青年期精神医学といった分野への対応力を高めた多機能・高機能型の『精神科総合病院』と主として慢性期の患者を主体とした単機能型の精神科病院に分化していくのではないと思われる。こうした考えに基づき『にも包括』時代における精神科病院の生存戦略を述べたい。

略歴：1988年藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）卒。初期研修ののち、藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）内科学講師、みよし市民病院内科部長等を経て、2021年4月より医療法人愛精会あいせい紀年病院に勤務し、2021年4月より副院長、同年10月より院長、2024年4月より常務理事・名誉院長。

須田 史朗

自治医科大学 精神医学講座 教授

抄録：自治医科大学は地域医療に従事するプライマリ・ケア医の育成をミッションとして設立された大学である。卒業生には初期臨床研修後の地域の診療所への勤務を含む卒業後9年間の義務年限が課され、その多くは内科・外科を中心とした一般診療科に勤務する。卒業生が精神科医になることはあまり想定されていない。したがって、自治医科大学の精神医学教育では「精神科の魅力を伝える」という点よりも、ジェネラリストが精神疾患患者に対応する時の心構えについて考えさせる、社会的に注目されている精神医学的トピックなどを正しく理解する、といった点が重視される。具体的には、臨床研修を通じた精神疾患へのスティグマの軽減やスティグマに対するセルフモニタリングを促す取り組みを行い、精神科医療への関与医師を持つジェネラリストを少しでも増やすことを目標としている。

本講演では自治医科大学の医学部教育が目指すところである「精神科以外を専攻する医師のために必要とされる精神医学教育」を紹介し、さらなる議論への足がかりとしたい。

略歴：1996年東北大学卒。自治医科大学附属病院精神科、Yale大学分子精神医学部門、浜松医科大学子どものこころの発達研究センターの勤務を経て、2011年より自治医科大学精神医学講座講師、2015年より同講座教授。

石井 美緒

川崎市総合リハビリテーション推進センター

略歴：2007年札幌医科大学医学部卒業。沼津中央病院、横浜市立大学等で児童思春期精神医療、急性期精神医療における非自発医療、共同意思決定について臨床と研究に携わった後、現在は川崎市において精神科救急、若者のメンタルヘルスケアに関わる。

長島 美奈

公益社団法人人生駒会 松戸診療所 代表理事

略歴：1984年明治学院大学卒 精神保健福祉士。1965年から2011年まで千葉県精神科医療センター（現・千葉県災害総合医療センター）等に精神保健福祉相談員として勤務。千葉県を退職し公益社団法人人生駒会松戸診療所を立ち上げ、代表理事として運営。診療所は精神科・心療内科診療、認知症デイケア、主として高齢者の往診を行っている。